

アンケートによる湯川の釣魚実態調査(2005年度)

独立行政法人水産総合研究センター

中央水産研究所内水面研究部

上席研究官

北村 章二

1. 目的

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯川において釣魚者へのアンケート調査を行い、キャッチアンドリリース(C&R)制となって4年目の釣魚実態を把握した。

2. 調査場所

調査対象の湯川は日光国立公園内に位置しており、湯の湖から流出し、戦場ヶ原湿原を通り、中禅寺湖へ注ぐ全長約 11.2km の一級河川である。元来、湯の湖、湯川、中禅寺湖等の奥日光水域には魚類が生息していなかったといわれているが、1902年にアメリカから導入したカワマスが放流されて以来、湯川は我が国でも珍しくカワマスの釣れる川として人気を博している。釣魚期間は5月1日～9月30日までである。湯滝下から竜頭の滝上流部までが釣魚区間であるが、途中戦場ヶ原湿原内の一部は禁漁区間となっている。釣魚対象魚種はカワマス、ニジマス、ヒメマス、ホンマスである。このうちカワマスは天然繁殖魚の他、成魚放流によるものであるが、それ以外の魚種は湯の湖から落下してくるものである。2001年の調査結果及び釣魚者からの要望を踏まえ、2002年から全域がC&R釣り場となっている。

3. 調査方法

釣魚期間開始前の資源調査結果及び釣り人の要望を踏まえ、本年は昨年と同様放流を全く行わなかった。

調査は2005年5月1日から9月30日までの釣魚期間中に行った。釣魚者(釣り券購入者)全員にアンケート用紙を配布して記入を依頼し、3ヶ所の釣り券売場(湯の湖釣り事務所、湯滝レストハウス、赤沼茶屋)もしくは釣り場に設置した回収箱にて回収した。釣魚方法(餌釣り、ルアー釣り、フライ釣り)、釣獲魚種、釣獲尾数、釣魚場所、釣果満足度等のデータを解析に供した。

4. 調査結果

釣魚者 4,532名中、アンケート回答数は1,386あり、回答率は30.6%であった。回答者の釣り方別の割合はフライ釣りが圧倒的に多く85.5%、次いでルアー釣りが12.0%、餌釣りが2.4%の順であった(図1)。

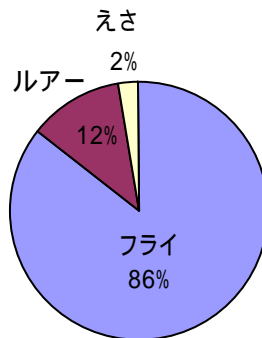


図1．釣り方別回答者割合

月毎の回答率を図2に示した。5月は回答が最も多く53%であったが、6月には35%、7月は22.9%、8、9月はそれぞれ20.9%、14.9%と減少した。

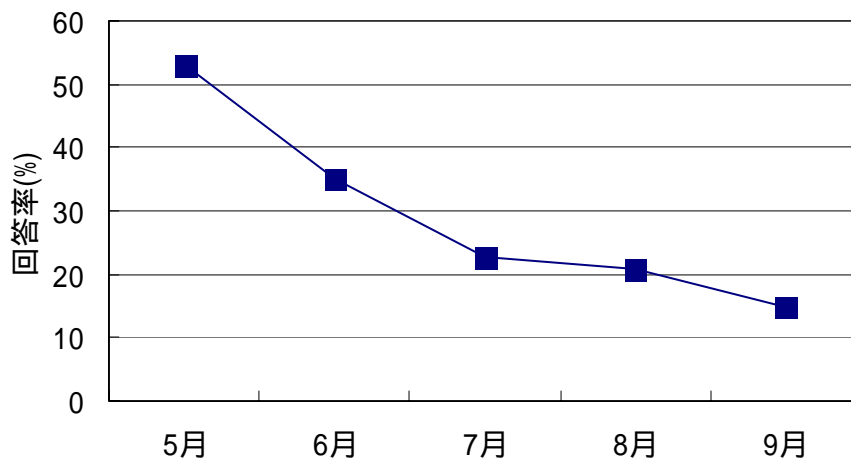


図2．月毎の回答率

全釣魚区間別に回答数を示したのが図3である(湿原域を赤色で示した)。昨年と同様上流域の1～3区が人気上位を占めた。2区が最も多く、1区、3区と続いた。1～3区はC&R制導入後、年々利用者の割合が高まってきている。一方、下流の9,10区の利用者は顕著に減少している。

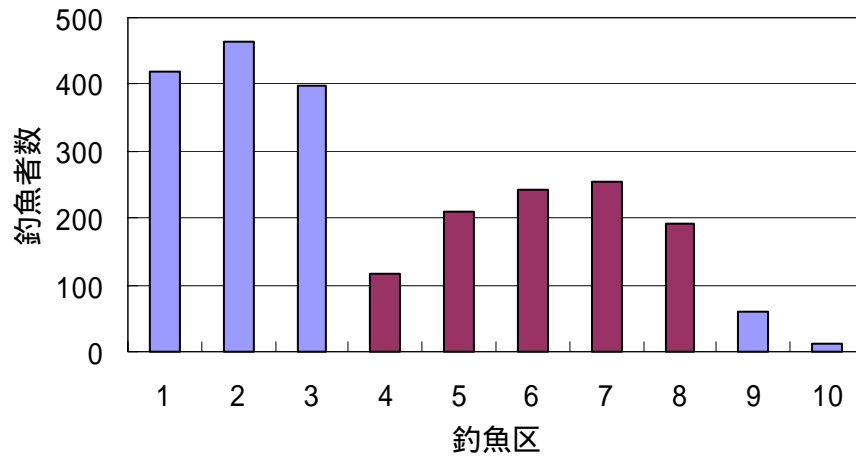


図3．釣魚区毎の回答数

図4に月毎のカワマスの釣獲率（1人1時間当たりの釣獲尾数）を釣り方別に示した。期間中を通した釣獲率は、フライ釣りが1.39、ルアー釣りが1.15、餌釣りが3.26で、餌釣りが最も高かった。フライ釣りでは5月に1.72と釣獲率が最も高かったが、その後徐々に減少した。

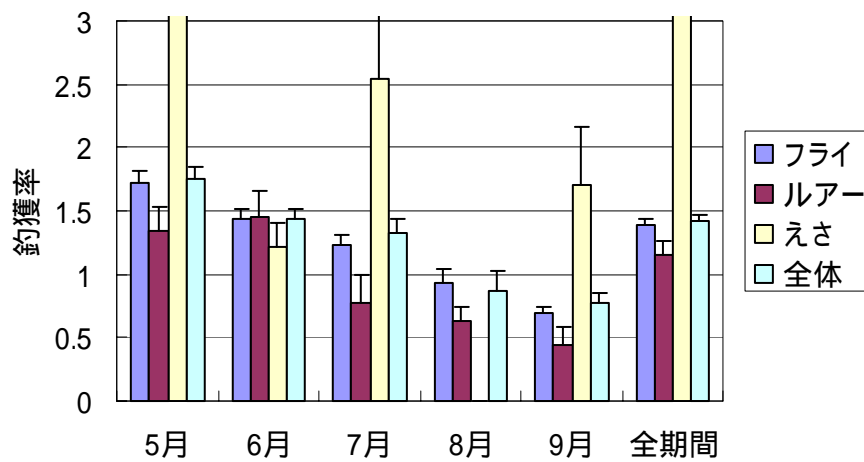


図4．月毎の平均釣獲率

図5に釣果と満足度の関係を示した。「不満」を除く「満足」、「ほぼ満足」の合計割合は1日の釣果6尾以上でほぼ80%以上に達していた。

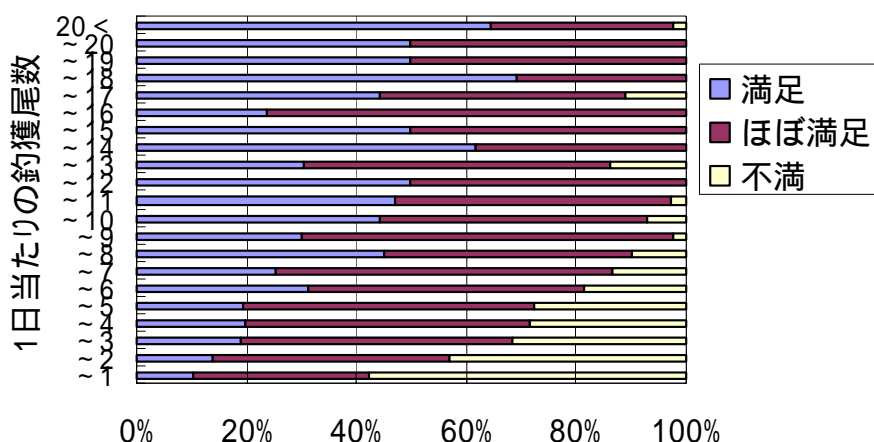


図6 . 釣果と満足度

5 . 考察

今年度の調査では、これまで同様、回答数は5月が最も多く、その後しだいに減少していったが、回答率は30.6%とこれまでで最も高く、年々信頼性の高い調査結果となっているものと思われる。今後さらにシーズンを通してコンスタントな回答を得るための方策が必要と考える。

アンケート回答者のうち、釣り方別ではこれまで同様フライ釣りが圧倒的に多く85.5%を占めた。C&R制釣り場の特徴を表しているものと思われる。

釣魚区間別にみると、上流域の1, 2, 3区が多く利用されていた。2002年度のC&R制設定以降、上流の渓流域の利用者が増加する傾向にあったが、今年度もさらに上流域利用者の割合が増加していた。C&R制設定に伴って、主に上流域の1, 2, 3区を利用していた餌釣魚者の数が顕著に減少するにつれ、これまで中流域を主に利用していたフライ釣魚者が上流域を多く利用するようになったものと思われる。あるいは、放流がなくなり中流域の魚影が薄くなったため、魚の非常に豊富な上流域に釣魚範囲を広げたのかもしれない。一方、下流域の9, 10区は、C&R制導入以来、年々利用者が減少してきている。今後は下流域の有効な利用形態を検討する必要がある。

カワマスの1時間当たりの釣獲率は平均が約1.42尾で昨年を大きく上回った。今年も去年に引き続き成魚放流を全く行わなかったが、解禁当初の中下流域を除いてコンスタントに釣果があったものと思われる。釣果満足度の調査結果によると、湯川の釣り人の80%以上は1日約6尾(1時間当たり約0.95尾)以上の釣果でおおむね満足していることから、今年度の平均釣果でも十分なものであると考えられる。また、4区において別途行った解禁前と禁漁後の資源量調査の結果から、放流を全く行わなくてもC&Rの定着及び天然繁殖により資源が豊富に維持されていることが明らかとなった。